

馬巷城隍廟の保長公（白無常）信仰

—無常鬼像の変遷を探るための一事例として—

大 谷 亨

要 旨

無常鬼は、白無常が単体の場合（〔○〕）と黒白無常がペアをなす場合（〔○●〕）がある。旧稿では、〔●〕の事例が存在しないことから、〔○〕は〔○●〕よりも古層の形態であると推論した。本稿は件の仮説を、馬巷城隍廟とその周辺で展開する多様な無常鬼信仰から再検証したものである。当城隍廟は無常鬼を〔○●〕の形態で祀るが、人々は白無常を特権的に「保長公」と呼んで重視し、またその周囲には保長公を単独で祀る廟が点在した。各形態に伴う伝承や祭祀の比較作業を通じ、〔○〕と〔○●〕は無常鬼という像を共有しつつも、神明としての性質が各々異なることが判明し、またその相違の様相から、前者がより古層にある可能性が再浮上した。

【キーワード：無常鬼 / 黒白無常 / 謝范將軍 / 保長公 / 城隍廟 / 廈門】

0. 序論

筆者は、漢民族の民間信仰を研究対象とし、特に「鬼から神へ」¹の問題系を、無常鬼（中国の死神）の変遷史から再考しようとしている。拙稿（2017）²では、その下準備として、白無常と黒無常がペアとなった今日の無常鬼像（図1³）を相対化するため、清末の絵入新聞『点石斎画報』を主な資料に、無常鬼の出現形態を調査した。結果、白無常が単体で出現する形態（以下、〔○〕）が最も多く、次に白無常と黒無常がペアとなる形態（以下、〔○●〕）が続き、黒無常が単体となる形態（以下、〔●〕）は皆無であった。この調査結果から、黒無常（●）というのは白無常（○）ありきの存在であり、無常鬼の原初的形態としてはまず〔○〕があって、その後〔○●〕が派生的に生じたのではないかと、換言すれば〔○〕は〔○●〕に比べ、その信仰形態においてより古層にあるのではないかと結論づけた。

一方、各形態の分布に著しい偏りが見られること、特に〔○●〕が祭祀関連の記事（廟に祀られた無常鬼の塑像、或いは迎神賽会で行進する無常鬼の仮装姿が描かれている記事）に集中している点などは、重要と認識しながら十分な考察を行うこと



図1 今日の無常鬼像

ができなかった。この問題について現在加筆が許されるならば、下掲の図2⁴と共に、以下のような仮説を提起したいと考える。

すなわち、本来独立して存在していた無常鬼（〔○〕）は、（なんらかの理由で）冥府の官僚機構（パンテオン）に取り込まれ、泰山府君や城隍神の部下として東嶽廟や城隍廟で祀られるようになる。それに伴い、廟というシンメトリックな空間に誘発され、（廟内で主神に付き従う低位の神々——文官／武官、牛頭／馬頭、順風耳／千里眼 etc. がいずれも一対の構造を有しているように）白無常／黒無常（〔○●〕）に分裂したのではなかったか、と。

筆者は上記の作業仮説を提起することで、これまで変容の表層をたどるのみに終始していた調査レベルを、変容の原因究明まで深めたいと考えている。なぜ無常鬼は〔○〕から〔○●〕へと変容したのか（より正確には、〔○〕から〔○●〕が派生し、次第に〔○●〕が多数派化したのか）。かかる問いへの回答は、〔○〕や〔○●〕における無常鬼のあり方がそれぞれどのように異なるのか、無常鬼信仰をめぐる多様な事例を調査していくなかで検討されねばならない。本稿はその一環として、福建省廈門市で実施したフィールドワークの成果とともに、上記の問題について考察を試みるものである。

福建には今なお無常鬼を祀る廟が数多く存在するが、本稿で特に取りあげるのは、廈門市翔安区馬巷鎮三郷社区にある城隍廟とその周辺に分布する3つの廟である。いずれの廟にも無常鬼の姿が確認されるが、ある廟は〔○●〕の形態で、ある廟は〔○〕の形態で祀り、祭祀の様相や語りつがれる民間伝承もそれぞれ独特である。それらを丹念に調査し、比較対照することで、無常鬼信仰の多様性あるいは多層性を考察していきたい。



図2 廟内でシンメトリックに配置された黒白無常

1. 馬巷城隍廟の白無常と黒無常

福建省廈門市翔安区に属する馬巷鎮には城隍廟がある。当廟は乾隆四十年（1775）に建立され（当時当該地域は泉州府に従属）、嘉慶十二年（1807）に現在の位置にて再建される。その後、長

らく修復されることなく廟は荒れ果てることとなるが、1988年に廟再建を目的とした委員会が発足し、それを機に、1991年にまずは廟の外観が整えられ、1994年に廟内の備品が完備される⁵。この際に復元され、今日我々が目にすることのできる馬巷城隍廟の内部構造、特に神像の配置を模式的に示したのが下掲の図3である。

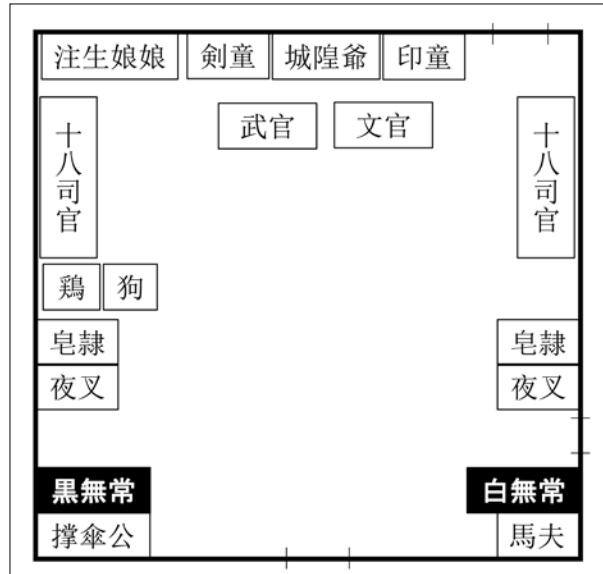


図3 馬巷城隍廟の内部構造（筆者作成）



図4 馬巷城隍廟の黒白無常

神像のビジュアルは図4⁶に見えるとおり、長軀（約3m）の白無常は、「一見大吉」と書かれた山高帽をかぶり、左手に「善惡分明」と書かれた虎牌を握っている。一方、短軀（約1.5m）の黒無常は、頭に戒箍を着け、右手に「令」と書かれた火籤を握っている。このような白無常と黒

無常（以下、両者を併称する場合は「黑白無常」とする）のビジュアル（特に長軀と短軀の凸凹ペアという特徴）は、福建や台湾、シンガポール、マレーシアなど福建系の人々が多く暮らす地域（以下、これらの地域をカギ括弧付きの「福建」として総称する）においては典型的事例となっている。また、当廟の参拝客や管理人は、黑白無常を「謝范將軍」(謝必安＝白無常、范無救＝黒無常)や「七爺八爺」(七爺＝白無常、八爺＝黒無常)や「大爺二爺」(大爺＝白無常、二爺＝黒無常)などと呼ぶが、これも「福建」においてはオーソドックスな呼称である。

馬巷城隍廟の管理人 A は、黑白無常を「城隍爺の部将、現在の公安局に相当、悪い奴を捕まえる（城隍爺の部将，相当于现在的公安局，抓坏人）」と説明しつつ、以下のような伝承（謝范將軍の成神譚）を語る。

城が敵軍に囲まれ、主管が謝必安を救援に派遣した。謝必安は背が高く、走るのが速かった。行ったり来たりしているうちに疲労困憊し、息を切らし、舌を出して死んでしまった。范無救はそれを目の当たりにし、お堀に飛び込んで死んでしまった。後に謝范將軍の功勞を称え、城隍廟で彼らを祀ることとなった。⁷

（話者：60代男性、場所：馬巷城隍廟、時間：2019年6月7日）

出来事の発生した時間・場所等の情報が欠落した曖昧な語りであるが、当地に古くから伝わる伝承であるという。ちなみに、当廟の管理人 B に黑白無常の伝承について尋ねた際には、彼はシンガポールの某城隍廟が発行する定期刊行物を差し出し、筆者にその内容を読むように勧めた。そこには、以下のような伝承が記されていた。

謝范將軍は唐代の人物である。安祿山の謀反によって、玄宗皇帝は蜀へと逃れ、張巡が睢陽を死守していた。張巡は謝范將軍を城の外へ救援に派遣した。謝必安は背が高く足が速かったが、真っ先に敵軍に捕まり、城壁のてっぺんに吊されて死んでしまった。范無救は謝將軍を救おうとしたが、不注意で溺死してしまった。その後、とうとう睢陽城の兵は疲れ兵糧は底を尽き、敵軍に占領を許すこととなった。張巡と徐遠は死後に城隍爺として封ぜられ、謝范のふたりはその護衛將軍となった。⁸

謝范將軍を唐代の將軍に仮託した伝承であり、管理人 A の語るそれと酷似したものである。両伝承の関係性は定かでないが、少なくとも管理人 A、B の言説から明らかとなるのは、当廟の公・式見解として、黑白無常は謝范將軍と呼ばれ、城隍爺の部将である一対の神明と見なされているということである。ちなみに上記の伝承は、「福建」広域に伝わる謝范將軍の成神譚のひとつであり、同類系の伝承がいくつか存在する⁹。また、それらには、往々にして以下のような言説が伴う。

言い伝えでは、七爺の出遊に遭遇した場合は、ただ跪いて感謝すれば加護を得ることがで

きる。故にそれを「一見大吉謝必安」と呼ぶ。ただし、八爺の神巡に遭遇すると、それはそれは不運なことで、そこで命が必ず尽きる。故に「范無救」と呼ぶ。¹⁰

このように、謝范將軍の「謝必安」「范無救」という姓名は、両者の対照的な性格を表すと同時に、彼らがふたつでひとつの二元的関係であることを示している。今日の中国では、このような謝／范の関係性を、陰陽二元論を基調とした道教的宇宙観の表出とする解釈が通用している¹¹。しかし、実際のところ謝必安と范無救の関係性は本当に二元的なのだろうか（平たく言えば、両者は対等な関係なのか、ということ）——この点については慎重に検討する必要がある。

鈴木清一郎は台湾漢民族が神として認める対象を、「聖賢者または勲功、善行あるか、あるいは靈異あってこれがため、人帝または天帝に神として勅封されたもの¹²」とし、渡邊欣雄はその解釈を引きつつ、「生前の聖賢性・勲功・善行・靈異があって、最高神に勅封・任命された〈鬼〉こそが神といえる¹³」と指摘する。謝范將軍をめぐる上掲の伝承は、この〈神明の条件〉におおよそ呼応するものといえるが、ひとつ不可解な点が残る。それは、神明たる条件のひとつ「靈異」をめぐる謝必安と范無救の格差である。

濱島敦俊は、鬼が神になる際に重要となる3つの要素を「生前の義行」「顯靈」「勅封」とし、なかでも顯靈が必須であると指摘した¹⁴。三尾裕子も同様に、「条件のなかの一つ——つまり靈驗——があることにより、靈魂は『神』への階梯を上昇しはじめ、徐々に『神』に必要なさまざまな体裁——祭祀方法、建造物等——が整えられていき、それにあわせて『神』になるために必要な權威の源泉となる生前の行いに関する『伝承』ができて上がっていくのではないだろうか¹⁵」と述べている。

では、その〈靈驗（靈異、顯靈）〉という観点に立った場合において、謝必安と范無救の関係はどのように評価されるべきか。現世利益を至上の価値とする漢民族の民間信仰において、人々の望む〈靈驗〉とは「迎福攘災」を叶える能力に他ならない。その価値基準に基づけば、福や富など幸をもたらす前者、死という不幸をもたらす後者の関係性は、先述の道教的二元論とは裏腹に、不均衡なものとならざるを得ないはずである。つまり、〈靈驗〉の方向が負性に向かう范無救は、対照的な相棒謝必安との比較上、少なくとも民間信仰という場においては相対的に存在意義が希薄な神明とならざるを得ないのである。

現に、馬巷城隍廟の謝必安と范無救のあいだには、理念としての二元論とは裏腹に、明確な格差が見て取れる。それが最もよく顕れるのが、各神像の前に設けられた祭壇である。謝必安の祭壇には往々にして何かしらの祭品が供えられているのに対し、范無救の祭壇に何かがお供えられることはほとんどない。つまり、参拝客が好んで拝むのはもっぱら謝必安であり、その人気（香火の多寡）において謝＞范という非等価性が生じているのである。

先述のとおり濱島や三尾は、民間信仰の神々は〈靈驗〉を核として生成するとした。そのような観点に基づくならば、謝必安と范無救において核となるのは、〈靈驗（一見大吉）〉を一手に引き受ける謝必安であり、范無救はいわばその付属物である。換言すれば、范無救は謝必安ありき

の存在、ということになる。であれば、両者が二元的関係を形成するその前段階として、まずは謝必安が先んじて存在した可能性がここにおいて浮上するのではないだろうか（序論にて言及した作業仮説 [○] → [○●] を想起されたい）。

このことを裏付けるように、「なぜ人々は謝必安を好んで拝むのか」という筆者の問いに対して、管理人Bは以下のような伝承を語ってくれた。注意すべきは、彼らが謝必安に与えた奇妙な呼称である（〔 〕内の記述は筆者による補足）。

ここら辺では彼〔謝將軍〕のことを保長公と呼ぶんだ。彼は地域の安全を守っている。保長公は城隍爺の部将だ。かつて人々は彼に出会うのはめでたいことだと言った。夜に保長公に出会うのはめでたいことなんだ。こういう言い伝えは私が小さい頃からある。〔ここで筆者が、「では范將軍というのはどういう神さまなのか」と尋ねたところ、管理人Bは以下のように回答〕うーん、それはよくわからない。¹⁶

（話者：70代男性、場所：馬巷城隍廟、時間：2019年4月23日）

先述の通り、城隍廟の公式見解として語られたのは、黑白無常を謝范將軍という名のものとにふたつでひとつの存在とする伝承であった。しかし、ここで謝必安は「保長公」と呼ばれ、その帽子に書かれた「一見大吉」の四字に対応する[・][・][・]独立した伝承が語られている。その独立性は、「では范無救とはどのような神なのか」という問いに対する管理人Bの「よくわからない」という返答に象徴的である。なぜなら、管理人Bも認識しているはずの「公式見解」に則れば、「范無救は謝必安の相棒であり城隍爺の部将である」となるべきところが、現にそのような答えは返ってこなかったからである。つまり、ここから明かとなるのは、（范無救は保長公の相棒ではない、故に）〈保長公≠謝必安〉という不等式である。果たしてこの不等式は何を意味しているのか、保長公とはいったい何者なのか。

この問題を考察する手がかりは、思わぬところに存在していた。管理人Bは続けて筆者に、以下のような情報を提供してくれたのである。「あっちに小さな保長公があと3体あるよ（下辺另外还有三尊小小的保长公）」、つまり城隍廟の周辺に保長公を祀る廟が他に3カ所あるというのだ。

2. 馬巷城隍廟の周辺に点在する保長公小廟

管理人Bがいうように、城隍廟の周辺には、保長公を（単独で）祀る3つの小さな廟（以下、保長公小廟）が確かに存在した。城隍廟を含むそれらの廟はいずれも、城隍路・巷西路・馬巷南街・城隍南路に囲まれた三郷社区と呼ばれる行政区域に分布している。各廟の詳しい位置関係は、図5を参照されたい（周辺環境をよりよく理解するめに、本図には三郷社区に位置するその他の廟（+主神の名称）や祠堂も併せて表記した）。当該地区は家屋が密集し、その隙間を縫うような小道（狭いところでは幅50cmほど）が蜘蛛の巣のように張り巡らされている。城隍廟を起点に、迷宮を彷徨う様にしながら発見した3つの保長公小廟を、小論では（発見順に）保長公小廟

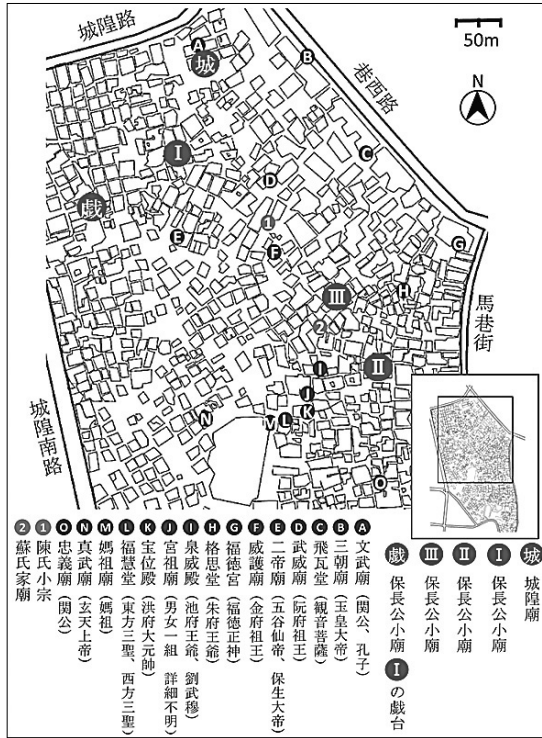


図5 三郷社区における各廟の分布（筆者作成）

I、II、IIIと名付けることとする。

保長公小廟はいずれも小規模で、その中には「一見大吉」の帽子を被り、「善悪分明」の虎牌を握った小さな保長公の神像（図6¹⁷）が祀られている。それらの誕生日はいずれも農曆五月五日とされ、誕生日当日は各廟で聖誕祭が催される（詳細は次項にて後述）。小廟Ⅰのみ独自の戲台を所有しており（図7¹⁸）、聖誕祭の際にはそこで歌仔戲が演じられる（小廟Ⅱ、Ⅲでは廟の傍らで木偶戲が演じられるのみ・図8¹⁹）。

このように半径200mほどの決して広くない範囲内に分布する3つの保長公小廟だが、廟の規模や分布の様態からも推察されたとおり、参拝客は廟のごく近隣に暮らす人々に限られている。では、周辺住民は保長公小廟をどのように認識し、参拝しているのだろうか。以下の部分では、主に2019年6月7日（農曆五月五日）の保長公聖誕祭において実施したインタビュー結果をもとに、上記の問題について考察したい。

まず筆者は、保長公小廟Ⅰに参拝に訪れていた60代の女性に「保長公はどんな神さまですか（保長公是什么样的神？）」と尋ねた。すると、女性は以下のように回答した。

冥界を司る神でしょうね。あと、泥棒を捕まえるの。泥棒がやって来て、わたしが捕ま
えられない時は、彼が捕まえてくれるの。非常に靈驗あらたかよ（管阴间的吧。抓贼，我们



図6 (左から) 保長公Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ



図7 小廟Ⅰの戲台



図8 聖誕祭の木偶戲

这里招贼的话，我们抓不到的话，他就会去抓，很灵的)。

(話者：60代女性、場所：保長公小廟Ⅰ、時間：2019年6月6日)

これを受けて筆者は、「保長公にどんなお願い事をするんですか（你们向保长公祈求什么样的愿望？）」と尋ねると、以下のような答えが返ってきた。

一家の平安、孫たちの学業、息子たちの事業の発展、息子の嫁たちの家事（全家平安，孙子们能读书，儿子们生业发达，媳妇们看家顾家）。

(同上)

また、上記のやりとりを聞いていた五六十代の男性たち数名（彼らは保長公小廟Ⅰのそばで賽銭箱を管理していた）は口々に、「保長公は冥界の神さまで、現在の公安局、平安をお守りしている（保长公是阴间的神，现在的公安局，保佑平安）」『一見大吉』さ、縁のある人だけが会うことができる（一见大吉，有缘的人才能见到）」保長公を夢に見ると、彼は進むべき道を指し示し

てくれる（梦见保長公，他给你指一条好路）」と述べた。

一方、保長公小廟ⅡおよびⅢを参拝していた人々は、上記と同様の質問（「保長公はどんな神さまですか」）に対して、以下のように回答した。

保長公は冥界であらゆる人々を管理していて、道行く人々をお守りするの。もし彼にばったり出会えばお金をたくさん儲けられるのよ。つまり幸運ということね（保長公在阴间管所有人，保佑路途的人。如果你碰到了他挣钱很多，就说好运呢）。

（話者：60代女性、場所：保長公小廟Ⅱ、時間：2019年6月7日）

保長公は白無常のこと。城隍廟にもいるよ（保長公是白无常，城隍庙也有）。

（話者：60代男性、場所：保長公小廟Ⅱ、時間：2019年6月7日）

保長公は事業や学業をお守りするの（保長公保佑事业、读书）。

（話者：40代女性、場所：保長公小廟Ⅲ、時間：2019年6月7日）

以上の部分において言及された保長公の要素を列举すると、①あの世の神、②悪人を捉える警察、③保佑平安（平安のお守り）、④金運をはじめ幸運をもたらす神、⑤＝城隍廟の白無常、となり、人々はそんな保長公に対して、家内安全や学問・事業の発展をお祈りするという（ちなみに、保長公小廟Ⅱの参拝客に「保長公に出会ったことがある人はいますか（有人碰到过保长公吗？）」と尋ねると、彼／彼女らは口々に、「いるよ！大勢いるよ（有啊！很多人呢）」と述べた）。

個々の語りにおいて、必ずしもこれらの要素が網羅的に言及されるわけではないが、平安や幸運を象徴する正性（③、④）と死や罰則を象徴する負性（①、②）が両義的に内包されている点、さらに、⑤のように保長公を城隍廟の白無常と同一視しながら、それを「城隍爺の部将」とする言説が確認されない点などが、とりわけ重要である。

さて、馬巷城隍廟に祀られる白無常は、「謝范將軍」といった名称によって黒無常と併称される一方、それ単体で「保長公」とも呼ばれていた。このことと併せて想起したいのは、保長公（こと謝將軍）について語る城隍廟の管理人に、「范將軍とはどのような存在なのか」と尋ねたところ返ってきた、「よくわからない」という回答である。この点について筆者は、上記のインタビュー結果を踏まえうえて、以下のように考える。

城隍廟では、黒白無常をめぐる公式見解として、両者を謝范將軍という呼称と共に二元的な関係性（ふたつでひとつの対等な関係性）で捉えていた。しかし、このことと相矛盾するように、謝必安は参拝客の人気を独占的に集めていた。なぜ人々は謝必安を好んで拝むのか。そのような問いを投げかけると、謝必安が個別的に保有する呼称（保長公）や性格（一見大吉）が饒舌に語られるのに対し、ふたつでひとつだったはずの范無救については、途端に「不明」となる。つまり、このことが逆照射しているのは、保長公と呼ばれる場合の白無常は、謝將軍とよばれる場合

の、つまり黒無常（范無救）の相棒として存在している場合のそれとは異なる神明として存在しているということではないだろうか。

保長公が、「黒無常の相方」ひいては「城隍爺の部将」という文脈を必ずしも必要としない独立した存在であることは、①保長公という独立した呼称、②白無常を単体で祀る保長公小廟の形態、③保長公は（黒無常が担うべき）負性も内包している点などに鑑みて、妥当な仮説ではないかと筆者は考えるが、次項では、保長公聖誕祭に対する各廟の異なる態度から、この問題について再検証することとしたい。

3. 保長公聖誕祭

保長公の誕生日は農曆五月五日と一様に定められている。故に聖誕祭当日には、保長公を祀る小廟Ⅰ～Ⅲおよび城隍廟の4カ所において祭が同時並行的に実施される。具体的には、各廟に参拝客が訪れ、小廟Ⅰ～Ⅲの傍らでは木偶戲や歌仔戲が奉納される（と同時に、城隍廟以外の各廟には賽銭箱が設けられ、主に劇団を招くための費用が、参拝客各人より奉加される）。表1に示したのは、保長公聖誕祭の大まかなスケジュールである。

		7：00	8：00	正午	16：00	19：00～22：00
Ⅰ	拜	大勢		ポツリポツリ		奉加者数：301人
	戯	木偶	昼休み	木偶	歌仔	
Ⅱ	拜	ポツリポツリ		奉加者数：55人		
	戯	木偶	昼休み	木偶		
Ⅲ	拜	非常に少ない		奉加者数：12人		
	戯	木偶	昼休み	木偶		
城	拜	ポツリポツリ				
	戯	上演なし				

表1 保長公聖誕祭のタイムスケジュール（筆者作成）

各廟には朝7時頃から祭品（豚肉、魚、果物、粽等々）や紙銭を携えた人々が集まりはじめ、参拝がおこなわれる。ただし、参拝者の数は各廟間で大きく異なっている。その数が飛び抜けて多いのが小廟Ⅰで、早朝から昼頃にかけて廟周辺は黒山の人集りとなる（図9²⁰）。それに続くのが小廟Ⅱ（図10²¹）と城隍廟（図11²²）である。これらの廟には、小廟Ⅰのように大勢の人々が一気に集まることはないが、参拝客の姿は断続



図9 保長公小廟Ⅰ

的に観察できる。そして、参拝客がもっとも少ないのが、小廟Ⅲ（図12²³）である。ちなみに、ここに確認された参拝者数の差は、表1に記載した奉加者の人数にも反映されている（奉加者の名前は廟の管理人によって記録され、後日、廟の傍らに掲示される）。

上述の通り、城隍廟では演劇が奉納されない。このことが示唆するのは、城隍廟／小廟Ⅰ～Ⅲの間に介在する、保長公聖誕祭に対する態度の差ではないだろうか（小廟Ⅰ～Ⅲの参拝者数に格差が生じる背景については紙幅の都合上、注24にて解説²⁴）。おそらく、城隍廟が保長公聖誕祭において演劇を奉納しないその理由は、前項までに議論してきた「保長公の独立性」と密接に関連しているのである。

前項で指摘したとおり、馬巷城隍廟に祀られる白無常は、謝必安という名のもと、范無救と黒無常と二元的関係で結ばれる一方、それは保長公とも呼ばれ、「黒無常の相方」あるいは「城隍爺の部将」という文脈に必ずしも依存しない独自の伝承が語りつがれていた。いうまでもなく、城隍廟の「公式見解」は、白無常を黒無常とふたつでひとつの存在とみなす、あくまで前者のそれであった。まさにこの公式見解こそが、保長公聖誕祭において城隍廟が演劇を上演しない直接的な理由と考えられよう。つまり、城隍廟という主体は、あくまで白無常を、城隍爺の部将であり、范無救（黒無常）の相方である謝將軍として祀るのであって、その文脈から外れる保長公が祭祀の対象とならないのは、原理的に至極当然といえるのである²⁵。

ただし、参拝客という主体が城隍廟の白無常に保長公の姿を投影するのは自由である（謝必安と保長公は姿形が同じなので、そのような現象が起きててもなんら不思議ではない）。そのため、保長公聖誕祭において、城隍廟の白無常を保長公と見なす人々が供物を捧げ参拝する一方、保長公のために城隍廟が主体となって募金することはなく、演劇も奉納されないという状況が生じるものと考えられる。いうなれば、城隍廟の白無



図10 保長公小廟Ⅱ



図11 城隍廟



図12 保長公小廟Ⅲ

常には、異なる2体の神明（謝必安と保長公）が内包されており、異なる主体による異なるまなざし（投影）によって、それは謝必安にも保長公にもなり得るのであろう（図13）。ちなみに、当廟を参拝するシンガポール、マレーシアの人々は、上記のそれらともまた異なる第三の無常鬼像をそこに投影するのだが、この問題については稿を改めて論じることとしたい。

上記の仮説の妥当性は、馬巷城隍廟に祀られる神々のなかで明確な誕生日を持つのが、城隍爺と保長公に限られるという点からも補強することができる。というのも、仮に農曆五月五日と定められた保長公の誕生日が、城隍廟を主体として定められたものならば、城隍爺の部将として対等な関係にあるはずの范無救（黒無常）に特定の誕生日が設けられていないのは極めて不自然だからである。ちなみに、農曆十一月十五日とされる馬巷城隍爺の聖誕祭では、その前後数日にわたって、道士が招かれ、木偶戯が上演され、大々的な儀式が執り行われる。城隍爺と保長公の（神明としての）格が異なるという点を差し引いても、その態度の径庭は明かであろう。恐らく、保長公聖誕祭という行事は、城隍廟で発生したものではなく、城隍廟の白無常（謝必安）に保長公の姿を投影する参拝客等の存在によって、保長公小廟から城隍廟へ流入したものと考えられる。

筆者は上記の仮説を、謝必安と范無救の非二元性をめぐる仮説（すなわち、●は○ありきの存在とする仮説）と接続したうえで、保長公小廟を無上鬼信仰におけるより古層の形態と捉え、その形態が城隍廟に取り込まれることによって変質および変形（[○] → [○●]）したと考えるが、かかる見解については以下の結論部分にて再度まとめることとしたい。

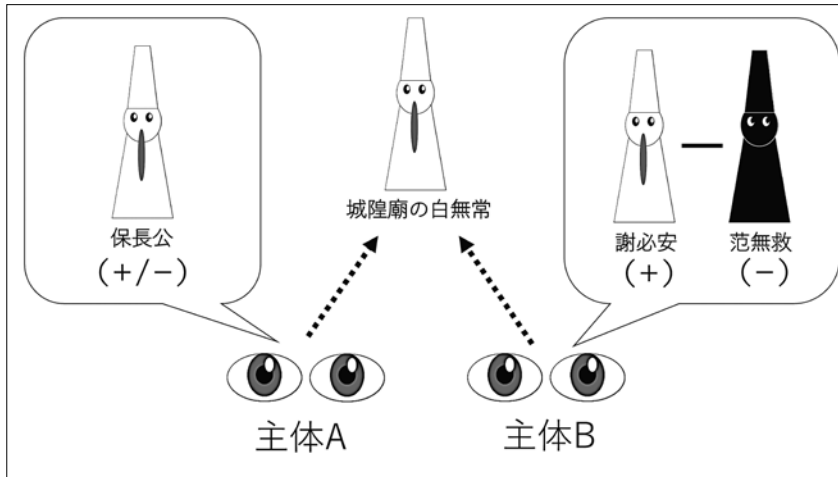


図13 白無常に投影される複数のまなざし（筆者作成）

結論

拙稿（2017）では、●は○ありきの存在であり、[○●]の前段階として[○]があったのではないか、という作業仮説を提起した。本稿は、その作業仮説を、馬巷鎮におけるフィールドワークから再検討したものといえる。かかる作業を通じて得られた成果は、上記作業仮説を補強するにとどまらず、新たな観点を提示し、より高い解像度で無常鬼の変遷を捉えることを可能とした。

以下、その内容を簡潔に振り返ることとしたい。

無常鬼を〔○●〕（謝必安＋范無救）の形態で祀る馬巷城隍廟では、謝必安と范無救の二元的関係を強調する公式見解とは裏腹に、香火の多寡をめぐる謝＞范という格差が存在した。このような現象が生じる背景には、〈靈驗〉の有無が関係していた。漢民族の民間信仰において、神明を神明たらしめるのは現世利益を叶える〈靈驗〉であり、その力が謝必安にはあつて范無救にはなかったのである。つまり、道教的な理念（建前としてのそれ）において対等な関係とされる謝必安と范無救は、〈靈驗〉という民間信仰の尺度においては主従の関係を露わにし、まさに「●は○ありきの存在」かつ「〔○●〕の前段階として〔○〕があつた」可能性が再浮上することとなった。

上記の推論を裏付けるように、謝必安を特権的に参拝する人々は、謝必安を「保長公」という特殊な名前と呼び、同名の神明を城隍廟の周辺で祀っていた。本稿では、それを保長公小廟と命名し、関連する民間伝承と祭祀の様相を調査した。結果、保長公小廟の保長公と城隍廟の謝必安は、白無常という形態を共有するものの、その存在のあり方が根本的に異なることが明らかとなった。その相違を端的にまとめるならば、保長公は単体で正／負の二元性を成立させるのに対し、謝必安は范無救と共に２体でその二元性を成立させていた。また、保長公聖誕祭に対する城隍廟の態度から、保長公信仰は城隍廟の文脈に属さない神明であることが明らかとなった。

上記の調査結果を総合したうえで、筆者は今後の展開のために以下のような変遷を仮説的に提起したいと考える——①畏怖の対象でありながら、時に福や富をもたらす無常鬼がいる、②その〈靈驗（一見大吉）〉を根拠に無常鬼が神として祀られるようになる（保長公小廟の段階〔○〕）、③神として祀られるようになった無常鬼が城隍廟に取り込まれ、道教的宇宙観を原理に再組織（権威化）される、④正／負の二元性を内包していた無常鬼が、白無常（正）と黒無常（負）へ分裂する（謝范將軍の段階〔○●〕）。

かかる作業仮説については、引き続きケーススタディを積み重ねていくなかで、検証していくこととしたい。

※本稿は、調査の過程で閩南語ネイティブスピーカーの洪思慧、洪鈺琳（いずれも厦門大学歴史系の院生）の多大な協力を得た。特に３つの保長公小廟の発見は、彼女らの協力なしにはなしえぬものであった。ここに感謝の意を表したい。

注

- 1 漢民族が〈鬼〉をいかに〈神〉として組織するのか、その仕方や原理についてこれまで多くの考察がなされてきた（例えば本稿で参照する濱島、渡邊、三尾等の研究がそれに該当する）。筆者は、無常鬼信仰を新たな事例として、先行研究の不足点を補おうとしている。ただし、本稿で展開する議論はあくまでその前段階として、無常鬼像の変遷をめぐる小さなピースのひとつを埋めようとするものである。
- 2 大谷亨「『点石齋画報』に描かれた無常鬼たち——白無常と黒無常の非二元性に着目して——」（『国際文化研究』(23) 東北大学国際文化学会、2017年）

- 3 『玉歴宝鈔』(河南：弘法寺、2002年) 30頁
- 4 『点石齋画報』『鬼染嗜好』寅十二・70a 葉。テキストは『点石齋画報』(広州：広東人民出版社、1983年)を使用。
- 5 馬巷城隍廟の歴史については、『泉州府馬巷廳志』(光緒十九年)、当廟の敷地内に建てられた石碑「重修馬巷城隍廟記」(1994年建碑)、廈門市翔安区志編纂委員会編『廈門市翔安区志』(北京：方志出版社、2011年)を参照。ちなみに、これら史料中に無常鬼に関する記述を見つけることはできない。
- 6 撮影場所：馬巷鎮三郷社区 馬巷城隍廟 撮影時間：2017年9月17日 撮影者：筆者
- 7 原文：城被敌军围困，主官派谢必安去救兵。谢必安个子高，跑得快，跑来跑去，跑得很累，喘气，吐着舌头死掉了。范无救看到这个，跳城河跟着死了。后来为了纪念谢范将军的功劳，在城隍庙里供奉了他们。
- 8 『聖佛山城隍廟 十周紀念特刊』(シンガポール：聖佛山城隍廟、2011年11月22日) 16頁。原文：相传谢、范二位将军是唐代人，安禄山叛变，唐明皇远避西蜀，张巡死守睢阳，张巡派谢、范二将军出城求援，谢必安身材高大脚程较快，首先遇敌受擒，被吊死城头，范无救为救谢将军，但也不慎溺水而死，后来睢阳城终于兵疲粮尽，而告失守，张巡、徐远死后被封为城隍爷，谢、范二人就成为他身旁的护卫将军。
- 9 無常鬼の成神譚については、陳威伯・施靜宜「七爺八爺成神故事研究」(『稻江学报』3 (1) 稻江科技暨管理学院、2008年)を参照。
- 10 林進源『台湾民間信仰神明大図鑑』(台北：進源書局、2005年) 233頁。原文：傳說，如果遇到七爺出遊，只要跪下謝福，必蒙陰佑，所以稱祂為「一見大吉謝必安」。但如遇八爺神巡，那可晦氣當頭，人命必終，所以稱「范無救」。
- 11 例えば、百度百科(オンライン百科事典)の「黑白無常」の項を参照。<https://baike.baidu.com/item/%E9%BB%91%E7%99%BD%E6%97%A0%E5%B8%B8/2379549?fr=aladdin>(閲覧日：2020年9月28日)
- 12 鈴木一郎『台湾旧慣 冠婚葬祭と年中行事』(台北：台湾日日新報社、1934年) 22頁。本稿で参照したのは『アジア学叢書(323)』(東京：大空出版社、2018年)所収の復刻本。
- 13 渡邊欣雄『漢民族の宗教—社会人類学的研究』(東京：第一書房、1991年) 189頁
- 14 濱島敦俊『総管信仰—近世江南農村社会と民間信仰』(東京：研文出版、2001年)
- 15 三尾裕子「賭事と「神々」——台湾漢人の民間信仰における霊的存在の動態」(田辺繁治編著『アジアにおける宗教の再生—宗教的経験のポリティクス』京都：京都大学学術出版界、1995年) 74頁
- 16 原文：我们这边把他(谢将军)叫保长公，他保佑地方的安全，保长公是城隍爷的部将，以前人家是说碰到他是好事，晚上碰到保长公就是好事了，这样说法从小就有。[ここで筆者が、「では范將軍というのはどういう神さまなのか(那么，范將軍是什么样的神呢?)」と尋ねたところ、管理人Bは以下のように回答]那就知道了。
- 17 撮影場所：馬巷鎮三郷社区 撮影時間：2019年6月7日 撮影者：筆者
- 18 同上
- 19 同上
- 20 同上
- 21 同上
- 22 同上
- 23 同上
- 24 前項で述べたとおり、一般に保長公小廟Ⅰ～Ⅲを参拝するのは、各廟の周辺住民に限られている。各廟周辺における民家の密集程度が大同小異であることを考えれば、聖誕祭での参拝者の数(及び、奉加者の数)において小廟Ⅰが突出しているのは、やや奇妙な現象といえる。しかし、その理由は単純で、聖誕祭に限っては、小廟Ⅱ、Ⅲの周辺住民が、(小廟Ⅱ、Ⅲを参拝すると同時に)小廟Ⅰへ(わざわざ遠出して)参拝に訪れるからである。このような状況に対して、小廟Ⅰの傍らで賽銭箱を管理する初老の男性たちは、「この廟が最も古い(这座是最古老的)」「この廟がリーダーだ(它是老大)」「城隍廟より古い(比城隍还早呢)」と小廟Ⅰの古さ(故の序列の高さ)を誇らしげに語る。かかる言説の(特にその「古さ」をめぐる)真偽は定かでないものの、小廟Ⅰ

が周辺住民のあいだで最も重要視されている（≒最も霊驗あらたかと認識されている）状況があるのは確かといえる。このような力関係は、小廟Ⅰのみが歌仔戲を演じられる大きな舞台を所有していることにも顕れていると考えられる。

- 25 馬巷城隍廟の管理人Bは保長公を城隍爺の部将として定義しているため、その点でこの仮説は破綻している。しかし筆者は、保長公を城隍爺の部将とする上記の言説は、城隍廟の白無常（謝必安）に保長公の姿が投影される過程で生じた伝承混交の産物と捉えることが可能と考える。現に管理人Bは、城隍廟の管理人であると同時に、保長公小廟の祭祀圏に暮らす周辺住民でもあり、彼の中で上記のような混乱が生じるのは十分にあり得ることである。いうなれば「無常鬼」「保長公」「謝將軍」等の（実態を持たない、人々の想像力に依拠する）概念は、人・場所・時間の相違によって微妙に揺れ動く、まさに無常な概念である。したがって、そのような概念を考察対象とする場合には、個別的な事例にも注意を払いながら、最大公約数的な要素を抽出し、それ（最大公約数）を基準に全体を包括しうる妥当な論理を構築していくことが（まずは）重要であると認識している。

参考文献

[史資料]

『泉州府馬巷廳志』乾隆四十一年修光緒九年重刊十九年補刊本

『点石齋画報』広州：広東人民出版社、1983年

『玉歴宝鈔』河南：弘法寺、2002年

『厦門市翔安区志』北京：方志出版社、2011年

『聖佛山城隍廟 十周年紀念特刊』シンガポール：聖佛山城隍廟、2011年11月22日

[論文・著作]

和文

大谷亨（2017）『『点石齋画報』に描かれた無常鬼たち——白無常と黒無常の非二元性に着目して——』『国際文化研究』(23) 東北大学国際文化学会、135-148頁

鈴木一郎（1934）『台湾旧慣 冠婚葬祭と年中行事』台北：台湾日日新報社（本稿で参照したのは『アジア学叢書（323）』（東京：大空出版社、2018年）所収の復刻本）

濱島敦俊（2001）『総管信仰—近世江南農村社会と民間信仰』東京：研文出版

三尾裕子（1995）「賭事と「神々」——台湾漢人の民間信仰における霊的存在の動態」田辺繁治編著『アジアにおける宗教の再生—宗教的経験のポリティクス』京都：京都大学学術出版界、55-80頁

渡邊欣雄（1991）『漢民族の宗教—社会人類学的研究』東京：第一書房

中文

陳威伯・施静宜（2008）「七爺八爺成神故事研究」『稻江学報』3（1）稻江科技暨管理学院、309-320頁

林進源（2005）『台湾民間信仰神明大図鑑』台北：進源書局

（大谷 亨 東北大学国際文化研究科アジア・アフリカ研究講座）